

西国三十三所巡礼（10・4・17）

前田 礼 三（昭24・理）

1 仏像について

仏像ブームがいわれて久しい。最近では若い女性の姿が多くなったという声を耳にするようになった。

昨年、東京上野の国立博物館で開催された「国宝阿修羅像」は、天平美術の頂点といわれ、凜凜しく崇高な少年のような姿に多くの人が引きつけられた。

美術専門の英・月刊誌「アート・ニューズペーパー」四月号が、二〇〇九年の展覧会入場者数ランキングの一位であったと発表した。阿修羅展の入場者数は一日平均一万五九六〇人に達したという。

私が仏像に魅力を感じるようになったのは、二度目の大阪での単身赴任生活（一九八八～一九九〇）に起因する。折角の機会を活かすための何か意義あることを求めようと考えた。関西には豊かな歴史の土壌がある。京都はある程度判っているが、それに比べて、奈良は全くの門外漢である。そうだ、古代が息づく奈良へ足向けよう。そう思い立ったのである。

大和路へは、できるだけ自分の足で歩くことにした。一つ一つの古刹にお参りする前に、そこに至るまでの道程が大切だということも判ってきた。

大和路の自然のたたずまい、四季を彩る名もない草花、川のせせらぎ、風の音、土の匂い、小鳥のさえずりなど、心を慰めてくれるもので溢れていた。

新薬師寺から紅葉に染まる滝坂の道を越え、柳生街道に面して、藤原期の浄土式庭園を前にした円成寺に辿り着く。ここでは、運慶二〇代の傑作、若々しく生気に満ちた「大日如来坐像」に直面する。そのときの感動は、今でも鮮やかによみがえってくる。

古寺巡礼の旅は、大和、山城をはじめとして、かなり広範囲に及んでいる。近江、播磨、紀州、若狭など、忘れられない名刹や仏像との邂逅があった。

自洲正子は、名著「十一面観音巡礼」で次のように述べている。

「昔、亀井勝一郎氏は、信仰と鑑賞の問題について論じられ、信仰のないものが仏像を美術品のように扱っているのは間違っているといわれた。それは確かに正論である。が、昔の人のような心を持ってといわれても、私達には無理なので、鑑賞する以外に仏へ近づく道はない。多くの仏像を見、信仰の姿に接している間に、私はそう思うようになった。見ることによって受ける感動が、仏を感得する喜びと、そんなに違う筈はない。いや、違っているのではないのだ、と信ずるに至った。」

私の好きな言葉である。

2 巡礼とは

広辞苑によると、巡礼を「信仰によって聖地・霊場を巡拝すること、キリスト教徒のパレスチナ巡礼、回教徒のメッカ巡礼、わが国では西国巡礼で知られる西国三十三所の観音霊場の巡礼や、弘法大師信者の四国八十八所回りの類」と定義している。

洋の東西を問わず、宗教的な聖地巡礼は盛んで、わが国で最も著名なのは、西国三十三

所と四国八十八所の巡礼である。

キリスト教のパレスチナ巡礼以外でも、北スペインのサンチャゴ巡礼（聖人やコブの墓）や、北フランスのルルド巡礼（聖母マリヤ信仰）などが有名で、後者は年間の巡礼者は三五〇万人ともいわれている。

宗教学者山折哲雄は、インド、中近東、ヨーロッパの数多くの聖地を巡礼している。彼は一神教と多神教の巡礼は異なるという。

彼の「西行巡礼」によると、「キリスト教徒は一生に一度はエルサレムへの巡礼を夢見る。イスラム教徒はひとたびメッカ巡礼を果たすことができれば、それで天国行きの切符を手にしたと固く信じている」と述べ、「キリスト教徒やイスラム教徒にとって、エルサレムやメッカは、文字通り世界の中心であり、宇宙の根源である。彼らは文化や人種や言語の違いを超えて、さまざまな地域からこの中心に向かって巡礼の旅を試みる。こうしてキリスト教徒やイスラム教徒にとっての聖地巡礼は、世界の中心に向かっての往復運動であるということが出来るだろう」と指摘する。

これに対して、例えばインドのような多神教的な文化風土では、代表的な巡礼路は円環状に巡り歩くことから成り立っていた。「聖地の巡礼がこのように一種の円運動をつくつ

ているのは、その円周上にさまざまな神を祀った聖地が点在しているからであると思う」といつている。わが国の西国札所も四国札所も円運動である。

文芸春秋平成二十二年三月号の、女流俳人黛^{マユズミ}まどかのエッセイ「日本人のスピリット」が興味深い。

北スペインのサンチャゴ巡礼に参加したとき、起点で巡礼証明書の交付を拒否された。理由は「詩を作りたいなら他の道を歩け。物見遊山の人間がいたら、敬虔な巡礼者が迷惑する」というのだ。

何とか許可を得て、巡礼路を辿り、路傍の小さな花を眺め、大樹の懷に抱かれ、水辺で鳥のさえずりに耳を傾ける。そんな彼女をみて、メキシコの敬虔なクリスチャンの青年が「あなたの歩き方は巡礼ではない。寄り道をせず一歩でも一秒でも早く神に近づくことが巡礼だ」というのである。

彼女は西洋的な一直線の道を、寄り道をすることで結果的に巡って歩いたのだ。遠い異国の地で感じたのは、芭蕉が詠んだ「奥の細道」の心であったという。

私は、古稀までに、西国三十三所と関東の坂東三十三所、秩父三十四所を合わせ、百観

音の巡拝を計画した。

坂東は一九九五年に、秩父は一九九六年に、そうして待望の西国は、一九九八年に満願打ち納めとなり、百観音巡礼を結願（ケチガン）することができた。

巡礼に加わるに当って、先ず念頭をよぎったのは、「自分のように宗教心のない者が参加してよいのか」との自問であった。

しかし、それは杞憂に過ぎなかった。

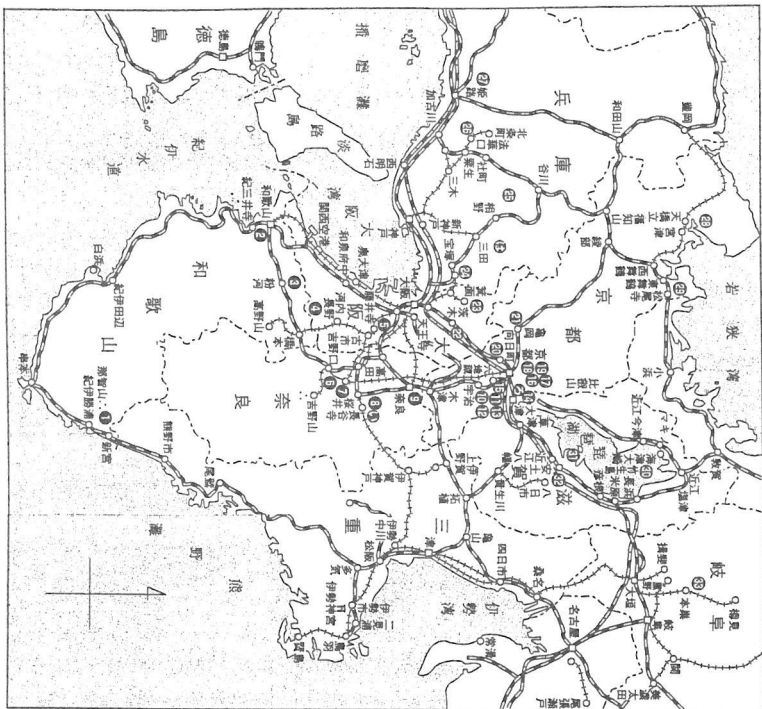
参加者の過半数は、定年退職で区切りをつけ、自分を見つめ直す機会としたいという動機であった。非日常の時間を体験したいといった好奇心もあったと思う。

巡礼は得難い体験であった。巡礼に参加した者でなければ判らない、貴重な充実感と達成感に満たされた。

三十三番札所で別れを惜んだ巡礼の友の幸せを祈りたいと思う。

西国巡礼三十三カ所

- 第一番……青原渡寺 ①
 第二番……金剛寺 ②
 第三番……杵河寺 ③
 第四番……麻植寺 ④
 第五番……鳳井寺 ⑤
 第六番……南法蔵寺 ⑥
 第七番……渡瀬寺 ⑦
 第八番……長谷寺 ⑧
 第九番……南円堂 ⑨
 第十番……三誓戸寺 ⑩
 第十一番……上醍醐寺 ⑪
 第十二番……正法寺 ⑫
 第十三番……石山寺 ⑬
 第十四番……園城寺 ⑭
 第十五番……観音寺 ⑮
 第十六番……清水寺 ⑯
 第十七番……六波羅寺 ⑰
 第十八番……頂法寺 ⑱
 第十九番……行願寺 ⑲
 第二十番……蓮臺寺 ⑳
 第二十一番……久太寺 ㉑
 第二十二番……総持寺 ㉒
 第二十三番……勝尾寺 ㉓
 第二十四番……中山寺 ㉔
 第二十五番……清水寺 ㉕
 第二十六番……一乗寺 ㉖
 第二十七番……円教寺 ㉗
 第二十八番……成相寺 ㉘
 第二十九番……松尾寺 ㉙
 第三十番……宝蔵寺 ㉚
 第三十一番……長命寺 ㉛
 第三十二番……観音正寺 ㉜
 第三十三番……華嚴寺 ㉝
 番外……法起院 ㉞
 番外……元慶寺 ㉟
 番外……花山院 ㊱



3 西国三十三所巡礼

(1) 歴史

わが国では歴史が最も古く、最も参拝者が多い。

伝説の域を出ないが、どの書物でも、西国観音巡礼は養老二年（七一八）大和・長谷寺の徳道上人によって創設されたとしているが定かではない。

徳道上人による巡礼は発展しなかった。

平安時代に入り、第六五代花山天皇は、在位わずか二年で皇位を退き、一九才の若さで出家して法皇となる。「大鏡」によると、これには藤原氏の謀略があったとされる。

花山法皇は、河内磯長・石川寺の仏現上人を戒師として得度授戒を受けた。播磨・円教寺の性空上人と摂津・中山寺の弁光上人等を伴って、霊場を巡礼され復興された。永延二年（九八八）のことである。

花山法皇は中興の祖とされ、今年五月まで、花山法皇示寂千年大遠忌として、関西では西国巡礼が関心を呼んでいる。

西国三十三所の番外とされる法起院、元慶寺、花山院は、いずれもこの徳道上人、花山



フェリー・サンフラワー号の船中で一泊。翌朝早い時刻の
洋上の情景。

法皇に因む寺院である。

(2) 順路

西国三十三所は、熊野那智の青岸渡寺を第一番とし、大和、洛中、近江の古寺を中心に近畿一円をめぐり、第三番美濃・華嚴寺で終る巡礼コースとなっている。

古くは一番大和・長谷寺、三三番宇治・三室戸寺とし、創始者の徳道上人を意識し、平安時代の時代背景が反映したものと思われる。その後幾多の変遷を経て、現行の姿になったのは室町時代といわれている。

“伊勢参り”とか“熊野詣で”との結びつきから、那智の青岸渡寺を一番



紀伊勝浦港に接岸したサンフラワー号の勇姿。

として、中山道を経て江戸への利便性から、美濃の華嚴寺が三三番へと変ったとの推論をする向きもある。

私が巡礼に参加したときの出発点は、東京・有明フェリーターミナルであった。フェリー・サンフラワー号で夜七時五〇分出航、船中一泊して、翌朝八時五分紀伊勝浦港に到着、その足で那智の滝を拝む。実に心憎いばかりの演出で、見事に巡礼者に変身したものだった。

西国三十三所を、現在の行政区画で分類すると、京都一一、滋賀六、大阪、兵庫、奈良各四、和歌山三、岐阜一となる。京都が突出しているのは、平安時代の設

計ということかも知れない。

太平洋と日本海、海と山と湖、山岳と都邑など、対比をはつきりと示しながら、そのなかで絶妙なバランスを保って、厳しい修業の側面をもつ巡礼者に、温かい心づかいを感じ



上陸するとその足で那智の滝を拝む。

させる配置ではなからうか。

紀州路、大和路、近江路、播磨路、丹波、丹後、若狭、洛中へと広がる西国巡礼の道程は、魅力一杯でいつまでも脳裏に浮かんで離れない。

(3) 宗派・本尊

西国三十三所の所属する宗派をみると、真言宗一五、天台宗一三で大半を占めている。平安時代の真言宗・天台宗といえば、仏教と山岳信仰との融合した山岳仏教を連想する。山中での修行のため、寺院は深山幽谷に位置する例が少なくない。

西国三十三所では、巡礼者を苦しめる、所謂難所といわれる札所がある。次に列記するが、札所番号は丸に数字で示す。

④ 施福寺（大阪・和泉）

槇尾山（海拔五三〇メートル）の山頂にあつて、片道一・一キロの山道で急坂である。二〇才の空海がここで剃髪したという故事がある。

⑪ 上醍醐寺（京都・伏見）

醍醐山（海拔四五〇メートル）の山頂まで、片道二キロの行程である。途中に「あ、醍醐味なるかな」と嘆賞したといわれる井戸がある。本尊は准胝観音。

⑫ 観音正寺（滋賀・安土）

キヌガサ
織山（海拔四三〇メートル）は、片道二キロとはいえ険しさではナンバーワンである。急坂なのと、石ころだらけの巡礼泣かせの山道が続く。

昔、難所として知られた⑭円教寺は、中腹までロープウェイがついて便利になった。⑮成相寺も、中腹までケーブルカーを利用できる。

西国三十三所の札所寺院の本尊は、千手観音一二、十一面観音九、如意輪観音六、聖観音三、不空罽索観音・准胝観音・馬頭観音各一となっている。

（4）特徴

西国三十三所は、他の札所に比べて、格式の高い規模の大きい有力寺院が多い。

本山寺院が一二（注）を数えるほか、広く知れわたっている名刹が目立つ。

（注）

- ② 紀三井寺 ③ 粉河寺 ⑧ 長谷寺 ⑨ 興福寺
- ⑩ 三室戸寺 ⑪ 醍醐寺 ⑬ 石山寺 ⑭ 三井寺
- ⑮ 観音寺 ⑯ 清水寺 ⑳ 中山寺 ㉔ 成相寺

また、札所寺院が、風光明媚なところに位置する例が多いことに気がつく。
思いつくままに記す。

- ① 青岸渡寺 那智の滝と熊野那智大社
- ⑧ 長谷寺 三九九段の廻廊と本堂の外舞台
- ⑬ 石山寺 近江八景・「石山の秋月」
- ⑭ 三井寺 近江八景・「三井の晚鐘」
- ⑯ 清水寺 清水の舞台と音羽の水
- ⑰ 円教寺 別名：「西の比叡山」
- ⑱ 成相寺 日本三景・天の橋立
- ㉔ 宝厳寺 琵琶湖の宝石・竹生島

(5) 京都の主な札所ほか

京都府に所在する札所は一一、そのうち市内は、近郊宇治を含め八である。

京都に関心のある方に、是非訪ねていただきたい札所を採り上げたいと思う。

⑩ 三室戸寺（宇治）

光仁・花山・白河の三帝の離宮の跡。格式高く、重層の本堂と三重塔が、背後の山に映えて美しい。

源氏物語宇治十帖の舞台となったところで、「浮舟の古蹟」が参道のかたわらにある。初夏には、紫陽花で全山を彩る。

⑮ 今熊野・観音寺（東山）

東大路の泉涌寺道から東へ入ると、俗塵を離れて静寂そのものの世界となる。

「みたら」の尊称で知られる、皇室の菩提寺・泉涌寺の塔頭である。弘法大師を開基とすると伝えられ、大師ゆかりの泉がある。最盛期には二八の莊園をもっていたという。

⑯ 清水寺（東山）



六角堂・頂法寺には有名な「へそ石」がある。ここが京の町を中心「へそ」であるともいう。

西国三十三所を代表する看板寺院である。坂上田村麻呂の寄進がはじまりという。

音羽の滝の水と、一三九本の柱に支えられた清水の舞台から眺める景観は、あまりにも有名である。

広く人口に膾炙されているので、説明を要しない。

⑰ 六波羅密寺（東山）

“市の聖” 念仏の空也上人の開基になる。寺院は、民衆のなかで生きた上人らしいたたずまいである。

宝物殿には、有名な空也上人立像がある。口から六体の阿弥陀仏を出す遊行の姿は、強い感動をうける。本尊の



第31番札所長命寺の麓の湖畔には「琵琶湖周航の歌」の歌碑が異彩を放っている。

国宝十一面観音立像は、秘仏で公開されないが、地藏菩薩立像をはじめ、数多くの傑作が待ちうける。

⑱ 六角堂・頂法寺（中京）

烏丸通りを北上、六角通りを右折すれば、すぐ左手が六角堂である。

境内に、京の町の中心を示す、六角形の「へそ石」がある。華道は元来、仏への献花から起こったもので、池坊の発祥の地である。聖徳太子を開基とし、太子のお供をした小野妹子が、仏前に花を供えたのが、流儀の開祖と伝えられる。

⑳ 成相寺（宮津）

琵琶湖周航の歌

大正七年

小田 千太郎 作曲
吉田 千秋 作詞

一 われは湖の子 さすらひの
旅にあれば しみじみと
のほる秋暮や さざなみの
志賀の都よ いざさらば

二 松は緑に 砂白き
雄松が里の 乙女子は
赤い梅の 森橋に
はかない恋に 泣くとかや

三 波のまにまに 漂へば
赤い油火 なつかしみ
行方定めぬ 浪枕か
今日は今津か 長浜か

四 瑠璃の花園 瑠璃の宮
古い伝への 竹生鳥
仏の御手に いだかれて
ねむれ乙女子 やすらけく

五 矢の根は深く 埋もれて
夏草しげき 堀のあと
古城にひとり 佇めば
比良も伊吹も 夢のごと

六 西国十番 長命寺
汚れの現世 遠くさりと
黄金の波に いざ漕がん
跡れ我が友 熱き心

「琵琶湖周航の歌」の歌詞が刻まれている。

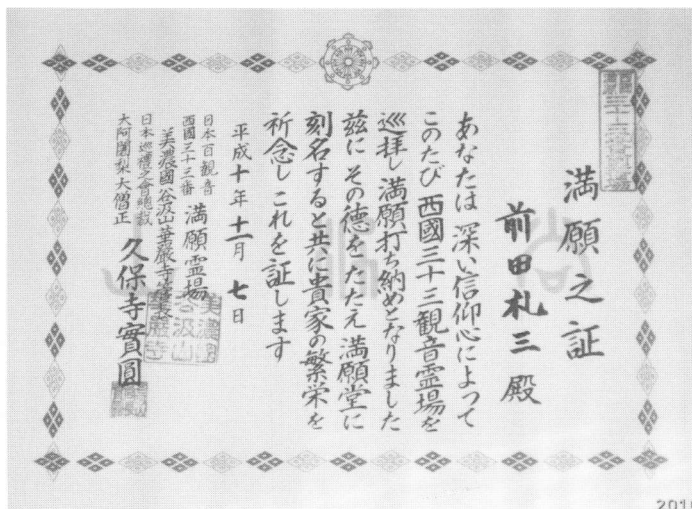
日本三景の一つ、天の橋立からは近い。
観光船で対岸へ渡り、ケーブルカーと山
上バスで山門に着く。

成相山の中腹から眺める景観は、正に
絶景というほかになく、雪舟の国宝「橋立
図」を想起する。

成相寺が保有する、奈良時代の半跏思
惟像の小金銅仏を、東京でみたことがあ
る。開創は七〇四年という。

②⑨ 松尾寺（舞鶴）

若狭の西端にある、若狭富士とも呼ば
れる青葉山の中腹にある。西国札所のな
かで、本尊が馬頭観音というのはここだ
けで、国宝・重要文化財を数多く所蔵し
ている古刹である。



西国三十三観音霊場を巡拝して満願打ち納めとなり、
第三十三番札所華嚴寺で受領した「満願の証」

小説家水上勉の故郷はこの近くで、
小説の舞台にでてくる。松尾心空住職
は、三高の出身である。

京都の札所ではないが、どうしても
登場してほしいのが、③長命寺である。

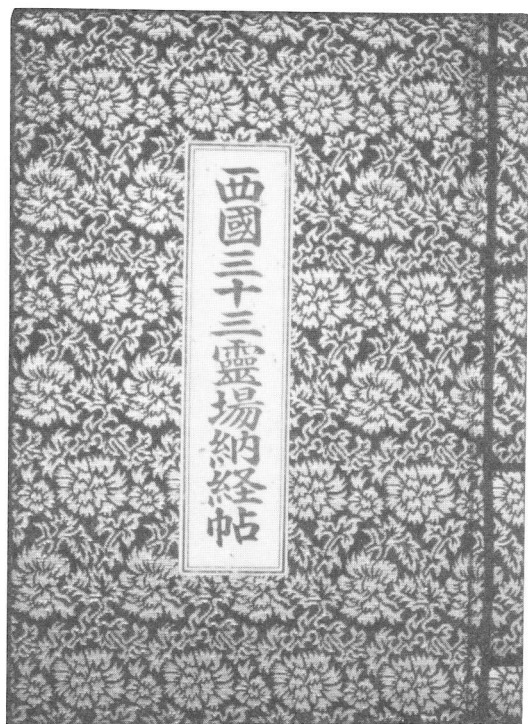
③ 長命寺（近江八幡）

近江八幡の水郷を通り抜け、長命寺
の麓まではバスがある。そこから八〇
八段の石段を上ると、本堂・三重塔・
鐘楼・三仏堂などの、雄大な伽藍に圧
倒される。

景行天皇の頃、武内宿禰によつて開
かれたというから寺歴は古い。風光の
佳さといい、品格のある姿といい、多

くの方にお参りを勧めたいと思う。

「琵琶湖周航の歌」では、西国十番長命寺となっているが、西国三番が正しい。湖畔には「琵琶湖周航の歌」の歌碑がある。



各札所で納経印を押捺していただいた
「納経帖」

4 あとがき

東京三木会の月例会で、「スピーカーが途絶えそうだから、誰か名乗り出てほしい」の緊急提案があった。

同期のM君の勧めもあり、後日「誰もいなければ、ピンチヒッターでやりましょう」と回答して実現したのが、今回のテーマ「西国三十三所巡礼」である。

四月一七日の定例会で話したことが、どうした経路で伝わったのか、一二月になって、三高自昭会から「面白いテーマだから、原稿をまとめてほしい」との申し出があった。

青天の霹靂^{ヘキレキ}といった気持ちで、急遽^{キヨ}書き綴った次第である。

(元・(株) 大和銀行 常任監査役)